



神戸大学附属中等教育学校英語評価尺度の開発と今後の展望 : 妥当性の検証を踏まえて

増見, 敦

(Citation)

研究紀要 : 神戸大学附属中等 論集, 1:57-70

(Issue Date)

2017-04-20

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81012786>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012786>



神戸大学附属中等教育学校英語評価尺度の開発と今後の展望

—妥当性の検証を踏まえて—

増見 敦

要 旨 本校英語科では、生徒に求められる英語運用能力に対する明確な到達目標を定めることを本校英語教育カリキュラム開発の核の 1 つに位置付けている。平成 24 年度の後期課程発足後より本校独自の英語評価尺度“Kobe University Secondary School Framework”の開発を開始し、平成 29 年度に KUSF 第 3 版の発行を迎える。本稿では、(1) KUSF の開発プロセス、(2) KUSF 第 2 版第 6 学年能力記述文の妥当性の検証、(3) KUSF 開発の成果と課題、(4) KUSF の今後の展望について記した。

キーワード 英語評価尺度 指導と評価の一体化 検証 CAN-DO CEFR

I. はじめに

近年の英語教育では学習指導要領の趣旨を踏まえ、生徒に求める英語力を達成するために「英語を用いて何ができるか」という視点（例えば CAN-DO 形式）による具体的な学習到達目標設定及び指導と評価方法の改善が求められてきた。

例えば「CAN-DO リスト」の作成は、平成 23 年 6 月に文部科学省の「外国語能力の向上に関する検討会」で発表された「国際共通語としての英語力向上のための 5 つの提言と具体的施策」により始められた取組の 1 つである。

提言では「中・高等学校では、各学校が、学習指導要領に基づき、生徒に求められる英語力を達成するための学習到達目標を『CAN-DO リスト』の形で具体的に設定することにより、学習指導要領の内容を踏まえた指導方法や評価方法の工夫・改善が容易になる」と示されている。その後、平成 25 年の第 2 期教育振興基本計画では、中学校卒業時及び高校卒業時における具体的な成果指標が設定され、それぞれヨーロッパ言語共通参照枠(Common European Framework of Reference for Languages (以下、CEFR)) (Council of Europe, 2001) が示す A1 レベル 50%, A2～B1

レベル 50%が目標に掲げられた (CEFR では ABC の 3 段階をさらに 2 分割した A1, A2, B1, B2, C1, C2 の合計 6 段階のレベルで言語力を示している)。その後、平成 26 年の「英語教育の在り方に関する有識者会議」では、学習到達目標の明確な設定と、指導と評価方法の改善が求められ、平成 27 年には、中学校 (公立中学校・中等教育学校の前期課程 9,522 校), 高等学校 (公立高等学校・中等教育学校の後期課程 3,409 校) を対象に英語教育実施状況調査が実施された (文部科学省, 2016a)。

その結果、「CAN-DO リスト」により学習到達目標を設定している学校の割合 (①) については、中学校、高等学校それぞれ 51.1%, 69.6%, また、「CAN-DO リスト」を設定している学校のうち、達成状況を把握している学校の割合 (②) については中学校、高等学校それぞれ 22.2%, 30.7%と報告された。また①について、平成 23 年度では中学校、高等学校それぞれ 7.5%, 4.0% (4 年間でそれぞれ 43.6 ポイント, 65.6 ポイント上昇), ②について、平成 23 年度では中学校、高等学校それぞれ 5.2%, 3.0% (4 年間でそれぞ

れ 17 ポイント、27.7 ポイント上昇)であったことも報告されており、「CAN-DO リスト」を用いた学習到達目標の設定と、その具体的な取組が全国の中学校、高等学校においてこの数年の間に急速に進められてきたことが確認できる。

一方、本校は、平成 21 年の創設以来、「グローバルキャリア人の育成」を教育目標に掲げ、グローバル・リーダーの育成に向けた様々な取組が行われてきた。英語教育への期待も大きく、生徒の「国際的コミュニケーション能力」の育成については、英語を基盤ツールとし、大学の研究入門レベルに対応する英語運用能力の引き上げが目標とされている。また、平成 27 年度に指定されたスーパーグローバルハイスクール (SGH) 事業では、「英語教育高度化」が研究開発の柱の 1 つに掲げられ、全生徒に対して、世界に発信できる英語力の習得の実現を目標に、カリキュラム及び指導法開発の研究が行われてきた。中でも、本校生徒に求められる英語運用能力に対する明確な到達目標を定めることを本校英語教育カリキュラム開発の核の 1 つに位置付け、英語科では平成 24 年度から現在に至るまで「神戸大学附属中等教育学校英語評価尺度 “Kobe University Secondary School Framework” (以下、KUSF)」の開発を継続してきた。国の指針、及び本校教育目標の指針に沿いつつ、本校の生徒が卒業時まで身に付けるべき英語運用能力等の到達目標を設定し、その到達度を評価する評価基準を設定することは、具体的な指導目標や学習内容の明確化にとって不可欠なものである。具体的な到達目標に準拠した指導と評価を行うことにより、それぞれの授業及び授業カリキュラム全体として統一感を持った取組の実現が可能となる。加えて、指導者と生徒が英語学習の到達目標を共有することで、生徒に「～できるようになりたい」といった目標を持たせ、英語学習への動機づけを高めることも期待できる。

本稿では、これまでの KUSF の開発プロセス、

能力記述文の妥当性検証の報告、そして KUSF 開発の成果と課題を踏まえ、今後の KUSF の展望についてまとめたい。

Ⅱ. KUSF 開発プロセス

ここでは、KUSF の開発の主たる開発プロセスについて以下に示す。

1. 学習到達目標設定に向けた検討体制の構築

平成 24 年の後期課程発足後、多くの英語教員が新たに赴任した。統一感を持った英語教育を実践するために、本校英語教育を通じて育成したい能力、生徒像、指導と評価の方法を検討するための英語教員体制を整えた。

2. 育てたい生徒像の確認

本校「グローバルキャリア人の育成」の教育目標に照らし、6 年間の英語教育活動を通じて育てたい「生徒像」について英語科教員全員で検討を重ねた。結果、「英語によるコミュニケーション能力を活用し、地球上に生きる人間として、自分の足元から世界を見る視点を持ち、同時に多様化が進む世界の動きの中で人々と協力・共生しながら自分の生き方を選択し、地球的視野で考え行動できる生徒」と設定した。

3. KUSF 初版の開発

上記の生徒像を踏まえ、英語運用能力の育成にあたっては、プレゼンテーションを通じた能力育成を目指すことを英語科教員の合議により決定した。そこで、プレゼンテーションに必要とされる技能及びレベル別の尺度を平成 24 年度末に KUSF 初版としてまとめた (第 1 図)。各能力記述文の開発については、CEFR の記述を参考に、4 技能に加え「やり取りすること」を含めた 5 技能を A1 から C2 の段階で記述し、1 年生から 6 年生の各学年段階にあてはめた。なお、各学年における到達目標達成率も添えた。

学年	熟達度	達成率	全体像	聞くこと
6 年	C1 (C2)	20%	やり取り能力がかなり進んだ段階である。quick response が比較的可能で、相手の意見と自分の意見を比較・対照しながら表現することができる。語彙数には限界があるが、発言内容に矛盾点がなく一貫性があり、結論とその根拠が明確である。また、情報収集力に優れ、外国人に質問したり、メディアから情報を集めたものを簡潔にまとめて発表できる。	社会的諸問題について、自分の意見を持ちながら、批判的に聞くことができ、質問ができる。講義や会議に参加してその内容を理解し、メモで要点をまとめることができる。応答も素早く適切に行うことができる。 聴解レベル：（通常の英語ニュース放送レベル）

第 1 図 KUSF 初版（平成 24 年度）より抜粋

4.KUSF 第 2 版の開発に向けたプロセス

KUSF 初版発行後、第 1 回生卒業までの 2 年間の教育実践を経て、平成 26 年度末に内容の見直しを行った。KUSF の妥当性の検証については、授業内各種評価（筆記テスト、エッセー、パフォーマンステスト、面接等）に加え、外部指標として中学・高校生対象の標準化されたスコア型英語テストである Benesse®の GTEC for STUDENTS を全学年で実施し、得られたテストスコアを活用し検討を行った。結果、(1)「熟達度」の設定に関すること（各学年での設定が高い）、(2) 能力記述文が実際の授業を反映しきれていない部分もあること、等が課題とされた。

これらの課題を受け、CEFR 準拠の英語到達基準「ジャパン・スタンダード」（以下、JS）（川成，2013）を参考に、(1) については生徒の実態に沿い、A1.3（1 年）から B2.1（6 年）に修正、(2) の能力記述文については、JS の熟達度レベル毎の言語能力記述文を参考に、実際の授業の実態にも応じつつ修正を行うことを英語科の合

議により確認した。

その後、平成 27 年度では、特に (2) の能力記述文の修正を重点的に行った。修正については英語科教員全員で取り組むことをねらいとし、週 1 回の教科会議の時間を使って検討が行われ、1 年間の時間を費やした。修正のプロセスについては、JS のレベル別記述の 4 要素 (①「条件（このような条件が整っていれば）」、②「話題・場面（このような話題に関して、このような場面・状況で）」、③「対象（この程度のもの（テキストタイプ、素材）を）」、④「行動（この程度〇〇することができる）」の考え方に倣った。各学年の実態を踏まえ、KUSF 初版全ての能力記述について再検討し、①から④の 4 要素に切り分けた記述を試みた（第 2 図）。その際、CEFR のレベルとの関係性を保つために、JS の能力記述文も参考にした。なお「やり取りすること」については JS では扱われていないため、CEFR-J（投野，2013）を参考とした。また、各レベル別記述について「限界域」を加えた。

聞くこと	
②話題	学習した内容に関連した社会的諸問題・異文化に関する話題について
③対象	講義・インタビュー・ニュースレポート等を
①条件	学校などで耳にする標準的な発音・標準的で普通のスピードで話されれば
④行動	自分の意見と比べながら、批判的な視点を持って（話題の主題を）理解できる。 英語で要点をまとめることができる。
(限界域)	込み入った情報については一回で聞き取ることに限界がある。

第 2 図 KUSF 初版の改訂に向けた検討例（平成 27 年度）

5.到達目標達成率の検証

平成 27 年度中に KUSF 初版の能力記述文の修正を行うとともに、同年度末に各学年における到達目標達成率の検証を行った。検証の材料として、平成 26 年度と平成 27 年度（3 年生は平成

27 年度のみ）に 6 年生及び 3 年生生徒を対象とした 7 月実施の文部科学省「英語教育改善のための英語力調査事業」（文部科学省、2016b）の本校結果資料を用いた。以下、結果の概要である（第 1 表）。

第 1 表 本校 6 年生及び 3 年生「英語教育改善のための英語力調査事業」の結果

	平成 26 年度 6 年生	平成 27 年度 6 年生	平成 27 年度 3 年生
受検人数	142	137	191
CEFR 平均	A2	A2	A1 上位
B2 人数	5	2	測定対象外
B1 人数	16	23	測定対象外
A2 人数	89	69	6
A1 上位人数	32	43	157
A1 下位人数			28

第 1 表から、B1-B2 については 6 年生の 2 つの年度共に約 15%～18%の達成率が確認された。KUSF 第 2 版 6 年卒業時の目標達成率の設定については B2 が 20%であり、7 月段階で B2 レベルの到達度は低いものの、当面は設定の修正を加えないことを確認した。

一方、KUSF 3 年次目標については当初 A2（達成率 80%程度）としていた。しかし、結果から 7 月時点で A2 達成度は 3%、A1 上位と A2 の合

計では 85%となっており、KUSF 3 年次到達目標について「A1 上位」も視野に入れた検討を行うことを確認した。

6.KUSF 第 2 版の発行

KUSF 初版の修正作業を経て平成 28 年度に KUSF 第 2 版を発行し、運用を開始した（第 3 図）。

学年	熟達度	達成率	聞くこと
6 年	B2.1	20%	学習した内容に関連した社会的諸問題・異文化に関する話題について、学校などで耳にする標準的な発音・標準的で普通のスピードで話されれば、講義・インタビュー・ニュースレポート等を自分の意見と比べながら、批判的な視点を持って（話題の主題を）理解し、英語で要点をまとめることができる。なお、込み入った情報については一回で聞き取ることに限界がある。

第 3 図 KUSF 第 2 版（平成 28 年度）より抜粋（「聞くこと」）

Ⅲ. KUSF 第 2 版能力記述文の妥当性検証

平成 28 年度の KUSF 第 2 版の運用を踏まえ、同年度末に、KUSF 第 2 版能力記述文の妥当性の検証を行った。なお、今回は第 6 学年の能力記述文の妥当性の検証に限定し、以下、調査の概要、並びに結果について報告する。

1.調査の概要

1)調査の目的とリサーチクエスション（RQ）

調査の目的は、KUSF 第 2 版の 6 年生の能力記述文についてその妥当性を検証することである。検討する RQ は以下の通りである。

- RQ 1 当該学年生徒の CEFR 到達率はどのようなものであるか?
- RQ 2 生徒は各能力記述文の重要性についてどのように認識しているか?
- RQ 3 各能力記述文は生徒の英語運用能力を適切に反映しているか?

2)調査データの収集

調査対象者を 6 年生 ($n = 111$) とし、平成 28 年 11 月に GTEC for STUDENTS を実施した。また同時期 (同年 12 月) に質問紙調査を実施し、第 6 学年到達目標 (B2.1) の各能力記述文に対する重要性、及び難易度の認識を尋ねた (第 4 図)。

英語の授業改善に関する意識調査【6 年用】				
神戸大学附属中等教育学校 英語科				
この調査は、もうすぐ卒業を迎える皆さんが、英語の技能に対して、どのような意識を持っているのか把握することを目的としています。それぞれの項目に対して、以下の 2 つの基準で該当する数字に○をつけてください。後輩達により良い英語の授業を展開することができるようご協力ください。				

【調査 1 「重要度」チェック】 →調査 1 の欄へ				
1	2	3	4	5
決して重要ではないと思う	重要ではないことが多いと思う	重要だったり、重要ではなかったりと思う	重要なことが多いと思う	絶対に重要だと思う
【調査 2 「できる度」チェック】→調査 2 の欄へ				
1	2	3	4	5
決してできないと思う	できないことが多いと思う	できたり、できなかったりと思う	できることが多いと思う	容易にできると思う

		調査 1 「重要度」	調査 2 「できる度」	
①【聞くこと】 学習した内容に関連した社会的諸問題・異文化に関する話題について、学校などで耳にする標準的な発音・標準的で普通のスピードで話されれば、講義・インタビュー・ニュースレポート等を自分の意見と比べながら、批判的な視点を持って (話題の主題を) 理解できる。		1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	
②【読むこと】				

第 4 図 質問紙調査 (抜粋)

なお、生徒の認識については主観的なものであり、いわば自己申告に基づくものである。自己申告による能力記述文の妥当性について、自己申告は申告者に依存するため、申告者の実際の能力を過大評価、もしくは過少評価する可能性が指摘されており (根岸, 2001; 長沼他, 2005), 以下では注意を要しつつ検討をしていきたい。

3)データ処理

以上の調査により、GTEC スコア (810 点満点) に加え、重要性スコア及び難易度スコア (5 件法) のデータが得られた。これらのデータセットに対し、以下の処理を行う。

- RQ 1: 得られた GTEC スコアの基本統計量 (平均, 標準偏差, 最小, 最大) を求める。
- RQ 2: 各熟達度群で得られた 5 技能別の重要性スコアの平均値について、熟達度群間に統計的な有意差があるかどうかを検討する。本調査で用いた質問紙は、厳密に言えば順序尺度であり間隔尺度ではないため、ノンパラメトリック検定の 1 つであるクラスカル・ウォリス検定を行う。
- RQ 3: 各熟達度群で得られた 5 技能別の難易度スコアの平均値について、RQ 2 と同様の分析手法を採用し、比較検討を行う。

2.調査結果と考察

1)【RQ1】CEFR 到達率

GTEC の結果を第 2 表に示す。

表 2 表 第 6 学年 GTEC トータルスコアの結果 (平成 28 年度)

	平均	標準偏差	最小	最大
全体 (n=111)	567.9	98.2	240	784

CEFR と GTEC for STUDENTS のスコアとの関連性については B2 (810), B1 (675-809), A2 (485-674), A1 (-484)とされている。第2表から、学年全体の平均的な CEFR 到達度が A2 レベルであること、到達度に大きなバラツキがあること、そして KUSS 第 2 版で第 6 学年の到達目標としていた B2.1 レベルの該当者が不在であったこと、が分かった。第 1 表も含め、3 年間に渡り 6 年生

のデータを収集してきたが、第 6 学年 (学年末)での到達目標レベルを B2.1 とすることに対して再検討を要する結果となった。

今回の GTEC の結果を踏まえ、今後の分析については、全体を B1 群 (n=14), A2 群 (n=83), A1 群 (n=14) の 3 熟達度群に分類して検討を進める方針とした (第 3 表)。

第 3 表 3 熟達度群の様子

	平均	標準偏差	最小	最大
B1 群 (n=14)	740.2	34.4	678	784
A2 群 (n=83)	565.7	51.8	485	670
A1 群 (n=14)	408.4	63.8	240	478

2)【RQ 2】各能力記述文の重要性の認識

RQ 1 にて生徒の英語運用能力のバラツキが客観的に示された。一方、生徒の各技能に対する意識についてはどのような様子であろうか。

ここでは KUSF の各能力記述文に対する重要性意識について見ることにする。以下、データ処理結果である (表 4)。なお、 p 値については、*: 5%有意, **: 1%有意, ***: 0.1%有意を示す。

表 4 重要性スコア平均値

	「聞くこと」	「読むこと」	「書くこと」	「話すこと」	「やり取りすること」
全体	4.5	4.3	4.3	4.4	4.4
B1 群	4.4	4.5	4.2	4.5	4.5
A2 群	4.6	4.4	4.3	4.5	4.4
A1 群	4.2	4.2	4.1	4.0	4.0
p 値					

どの技能、どの層の数値も全体的に高い。また、データ分析の結果、どの技能についても 3 群間の平均値に有意差は確認されなかった。このことは、B2.1 という高い到達目標ではあった

ものの、指導者と生徒の間で、学年末に向けた技能到達目標を共有し、指導者が目標に準拠した指導を行った結果、どの生徒も能力記述文の

示す意味とその重要性に対して、一定の理解を示していると判断できそうである。

3)【RQ 3】能力記述文と英語運用能力の関係

RQ 2 では、どの群の生徒も、能力記述文の重要性について一定の理解を示している様子が確

認できた。次に、各能力記述文が生徒の英語運用能力に基づく妥当な内容であるかどうかについて、生徒の英語運用能力、及び記述文に対する難易度の認識の側面から検討する。以下、データ処理結果である（第 5 表）。

第 5 表 難易度スコア平均値

	「聞くこと」	「読むこと」	「書くこと」	「話すこと」	「やり取りすること」
全体	3.2	3.2	3.1	3.2	3.1
B1 群	3.6	3.6	3.6	3.4	3.2
A2 群	3.1	3.1	3.1	3.2	3.1
A1 群	3.0	3.0	2.7	3.0	2.9
p 値					

結果を見てみると、どの技能、どの層の数値も全体的に高くはない。これは B2.1 に到達していないレベルの生徒の自己評価としては妥当であろう。また、どの技能についても 3 群の平均値の差に有意差は確認されなかった。このことは能力記述文が、今回の調査対象者の中で特定の英語運用能力を持った生徒を説明する記述となっていないことを示していると言えよう。

一方、すべての技能で、英語運用能力が高い生徒ほど能力記述文について易しいと認識する傾向が見られる。B2.1 に該当する生徒のデータがないため解釈には注意を要するが、更に英語運用能力の高い B2.1 レベルの生徒を想定した場合、難易度意識に対する傾向（同じような比率で易しいと認識する傾向）があるものと考え、その推定見込みのデータを加えた場合に、KUSF B2.1 レベルの能力記述文が B1.2 レベル以下の生徒と有意に区別し、B2.1 レベルの生徒を説明する内容となり得ているかもしれない。あくまで推測の域を出ないが、我々が検討を重ねて作成したこれらの KUSF 能力記述文（第 6 学年記述文）が B2.1 レベルを示す記述としてある程度妥当なものと考えられるかもしれない。

IV. KUSF 第 3 版（平成 29 年度版）への改訂

上記の調査結果を受け、英語科教員の協議を行い、KUSF 第 3 版へ改訂の運びとなった。主な改訂の項目は（1）卒業後の英語学習者の姿も含めた各学年 5 技能到達レベルの見直し及び能力記述文の改訂、（2）能力記述方法の改訂、（3）Grade の設定、（4）5 技能記述に 4 観点（「知識・理解」「論理的・批判的思考力等」「課題探究力」「グローバルキャリア（市民的資質・能力）」を加えたリスト作成、の 4 点である。

1.各学年 5 技能到達レベルの見直し及び能力記述文の改訂

まず第 6 学年（学年末）の目標のレベルを、KUSF 第 2 版での到達レベル（B2.1）より 1 つ下げた「B1.2」とした。これを受け、他の学年も到達レベルの修正を行った（6 年：B1.2, 5 年：B1.1, 4 年：A2.2, 3 年：A2.1, 2 年 I.3, 1 年：A1.2）。これに伴い、各技能の能力記述文についても全面改訂を行った。また今回の改定では、第 6 学年を最終レベルとせず、「卒業後」のレベルを設

定（B2.1, C1）した。卒業後の目指すべき目標とその姿を記述することで、生徒の自律的な学習を促進することを期待したものである。

2.各技能能力記述文の改訂

5技能の内「話すこと」については「話すこと〔発表〕」に変更した。その後、各能力記述文に

ついて、「論理性」の要素を加えた5要素（「内容（話題・場面）」「素材（対象）」「英語（条件）」「論理性」「行動（理解／表現）」）に区分し、各要素の内容を記述することを試みた。なお「限界域」は省いた。また「やり取りすること」では「発表者」と「聞き手」とに区分した記述を行った（第5図）。

段階	学年	英語5技能 熟達度	達成率	聞くこと	
Grade 6	第6学年 (学年末)	B1.2	20%	内容(話題・場面)	学習した内容に関連した社会的諸問題・各種報道でなじみのある話題
				素材(対象)	少し長めのスピーチ、インタビュー、ニュースレポート、短い講義等
				英語(条件)	標準的なことばではっきりとした発音。
				論理性	他者の意見を聞く時には、他の事実や自分の意見と比較・検討を行いながら、話し手の主張を理解し、議論を深めていくことができる。
				行動 (理解)	・日本語で概要のメモを取ることができる。 ・自分の意見を比べて聞き取ることができる。不足情報について相手に質問ができる。

第5図 KUSF 第3版（平成29年度）より抜粋（「聞くこと」）

3.Grade の設定

本校生徒の中には、帰国生徒等、習熟度が特に高い者もいれば、英語を苦手を感じている者も少なくない。このような状況の下、該当学年の目標だけを狙った授業を行った場合、そのレベルに達成していない生徒、逆にすでに達成している生徒に対する配慮不足が考えられる。

今回の改定では Grade を設定した。指導者が様々な Grade の授業を提供することで、生徒はあらゆる Grade の授業を受ける機会が得られる。このことは、どのレベルの生徒にも自分の達成度を把握できる機会が保障されることを意味している。自分で次の目標を設定し、不足してい

る部分を自ら補おうとする意識の涵養を期待したものである。

4.「5技能記述」プラス「4観点」の記述

本校ではグローバルキャリア人に求められる資質、能力の構成要素として3力（「実践力」「思考力」「基礎力」）5観点（「グローバルキャリア」「論理的・批判的思考力」「課題探究力」「知識・理解」「スキル・運用能力」）を挙げている。これと現行の学習指導要領、及び文部科学省の中教審答申（2016c）が示す観点別評価との関係性は以下の通りである（第6図）。

	観点1	観点2	観点3	観点4	観点5
現学習指導要領 (平成22年)	関心・意欲・態度	思考・判断・表現		知識・理解	技能
本校 構想 3力5観点	実践力 グローバルキャリア	思考力		基礎力	
		論理的・批判的思考力	課題探究力	知識・理解	スキル・運用能力
中教審答申 (平成28年)	学びに向かう力・人間性等	思考力・判断力・表現力等		知識・技能	

第6図 観点別評価の関係性

KUSF 第3版では、上記3力の関係性の整理を行うことを目的とし、「スキル・運用能力」(5技能別能力記述)に加え、他の4観点(「グローバルキャリア」「論理的・批判的思考力」「課題探究力」「知識・理解」)についても、各Grade

に対応する記述を行った。例えば、「グローバルキャリア」の観点では、中教審答申の示す「学びに向かう力」等の行動目標として、「コミュニケーション／意欲・態度」及び「文化理解／発信」の観点を設定し、記述を試みた(第7図)。

段階	学年	知識・理解	論理的・批判的思考力等	課題探究力	グローバルキャリア (市民的資質・能力)
Grade 6	第6学年 (学年末)	地球課題 世界社会(発展) ※地球課題や国際問題について多面的に理解し、問題解決へ向けた行動や提案を具体的に示している。	論理的思考力 ・テーマに対して、反論や意見が分かれる中で、一貫性のある自分の主張を作り出している。 多元的思考力 ・話し手、書き手からの様々な情報、意見を多面的にとらえ、自分なりの解決策を考えている。 体系的思考力 ・複数概念の比較をもとに独自の新しい概念化を試みようとしている。	地球課題探究(発展) ・地球規模の課題について自ら問いを立て、積極的に調査したり考察したりして結論を導き出している。 ・自ら調べたこと英語小論文形式にまとめている。	自律的思考と行動 共生・共存 ※地球規模の観点から、共生・共存をめざした自覚とその実現へ向けた自律的行動をしようと心がけている。 【コミュニケーション／意欲・態度】 ・英語力の向上に、自ら進んで英字新聞や英語ニュースなどを利用しようと心がけている。 ・世の中をより広く知るためのツールとして、英語を積極的に活用しようとする姿勢を持っている。 ・うまく言えないことがあっても、別の語句や表現で言い換えたり、説明をしたりしながら伝えている。 ・相手の立場を意識し、状況にあった言葉を選ぶなど、聞き手・読み手に優しいコミュニケーションを心がけている。 【文化理解／発信】 ・各国に対する先入観や思い込みを持つことなく、相手の個性を尊重している。 ・日本中心の観点からの発言が、異なる文化的背景を持つ人々に影響を及ぼすこともあることを考慮し、コミュニケーションを図っている。 ・日本の歴史や伝統文化、風俗習慣を正しく理解し、海外の人々に説明している。
Grade 5	第5学年 (学年末)	地球課題 世界社会(基礎) 国内社会(発展) ・国内社会問題を多面的に理解し、また国際問題の基本情報を理解している。		地球課題探究(基礎) ・地球規模の課題に対して、自分の問いを立て、リサーチをしながらその問いの答えを探している。 ・地球規模の課題に興味を持ち、自ら調べたことをまとめて、英語で積極的に表現している。	

第7図 KUSF 第3版(平成29年度)より抜粋

これらの改訂作業を行い、平成29年度KUSF第3版の発行となった(巻末資料)。一見して「スキル・運用能力」の割合が高くなっている。確かに実践力や思考力を高めることは大切であるが、英語運用能力の基盤となる力をおろそかにして他の力の達成はできないと考え、運用能力育成の観点に多くのスペースを割いた。

IV. まとめと課題

本稿では、神戸大学附属中等教育学校英語評価尺度(Kobe University Secondary School Framework)の開発プロセスについて、またKUSF第2版の第6学年能力記述文の妥当性の検証を踏まえ、KUSF第3版の改訂への歩みについて触れてきた。英語科全体で改訂に携わることで、(1)英語科の教員同士が英語指導に対する指導の方向性、育てたい生徒像の共通理解を持つことが可能になったこと、(2)具体的な

目標に向かって指導と評価を行うことが可能になったこと、といった成果を得ることができた。

一方、KUSF第2版の妥当性の検証では、調査方法に課題が残った。使用した質問紙調査(第4図)は第6学年の到達目標としているB2.1レベルの能力記述に関する内容を問うものであったが、B2.1の該当者がいない状態での調査となってしまったことである。これは、質問紙調査が、調査対象者の英語運用能力の調査結果を得る以前に行われなければならなかったため(学年末に第6学年全体が登校して質問紙調査が可能な時期が12月であったこと、GTECの成績受領時期が翌年1月であったこと)であった。

回答方法についても課題が残る。それぞれの英語能力の記述に対し、「1決してできないと思う」から「5容易にできると思う」までの5件法により難易度の認識を問うものであったが、KUSFの理念を考えた場合、生徒が「〇〇ができるようになった」と思うことが重要であり、

「できるようになった」と感じる度合いを評価すべきであった。「CAN-DO」という文言の意味にとらわれすぎると、「〇〇はできるようになっていない」「◆◆はできない」といった自己否定的な印象を植え付けかねない。例えば「以前に比べて／□年生になった時に比べて、以下の内容ができるようになったとどの位感じますか、その度合いをマイナス3からプラス3 (-3 -2 -1 0 1 2 3) で評価してください」と問いかけることにより、「頑張り度」の意欲を評価できるかもしれない。加えて、能力記述文の内容に様々な要素が含まれていたため、できるかどうかの判断を下すことが生徒にとって難しかったと思われる。

同様に、各能力記述文に対する重要度の認識についても「1 決して必要ではないと思う」から「5 絶対に必要だと思う」という問いかけをした。しかし、KUSF の理念として「◇◇が必要だと感じるようになった」と生徒が思うことが大切であり、「必要だと感じる度合い」を評価すべきであった。ここでも同様に、例えば「以前に比べて／◎年生になった時に比べて、以下の内容が必要だと思うようになったとどの位感じますか、その度合いをマイナス3からプラス3 (-3 -2 -1 0 1 2 3) で評価してください」とする工夫も考えられる。

VI. 今後の展望

これまでの成果と課題を踏まえ、ここでは以下3点について、KUSF に関する今後の展望をまとめることとしたい。

1点目は、KUSF 全体の枠組についてである。一連の改訂作業により KUSF 第3版を発行したわけであるが、KUSF の能力記述文に関して、定期的な検証及び修正を継続して行っていかなければならない。その際には各学年の授業の実態に沿いつつ、CEFR とのレベルの関係性を常に保つ必要がある。また、記述内容の精選につい

ては、「CAN-DO」という文言の意味にとらわれすぎることなく、あくまで授業改善につながる枠組の構築を目指していきたい。

2点目として、KUSF の枠組を作るだけでは、本校英語教育の大きな枠組を捉えることができたとしても、直接的な授業改善にはつながらないことである。「このレベルの力をつけるためにはこのタスクが必要」「この力がつかなかったのはこのタスクが良くなかった」といった要因を探ることが実質的な授業改善につながるものと考えられる。指導者が行う多様な活動やタスクの中で効果的なものもあれば、指導者は良いと思っているタスクが生徒には受け入れられないといったこともある。こういった場合に、タスクそのもの、あるいはタスクの順序やつながりの悪さに原因があることも考えられる。授業と評価の一体化を念頭に、KUSF の全体的な枠組作りと、具体的なタスクとの連動性についても、更なる検討を重ねていく必要がある。

そして3点目は、「生徒用 KUSF チェックリスト」の開発である。チェックリストの開発により、生徒と指導者が KUSF の目標を共有し、生徒による自己評価の活用が可能となる。自己評価を通じて、生徒は自分の学習の振り返りを行い、自分の英語力を客観的に見つめることができ、「外国語学習への意欲が向上したり、自信が持てたりする効果」(文部科学省、2013) が期待できるであろう。また指導者も、生徒の自己評価を踏まえ、少なからぬ生徒が「できるようになっていない」と判断している項目を重点的に取り上げて指導することが可能となる。生徒にとっては、自律した英語学習を進めていく上での支援ツールとして、また指導者にとっては、生徒のニーズや実態に応じた指導を進めていく上での支援ツールとして、KUSF の発展的利用が可能になると考えられる。「生徒用 KUSF チェックリスト」の開発においては先述の課題を活かし、まずは、どの生徒にとっても分かりやすく書き下した自己評価表の作成が目指されな

ればならない。そして、自己評価項目については、「頑張り度」の項目だけでなく、「重要度の認識」も項目に加えておきたい。重要度の認識については、例えば、海外研修を経た後に、英語技能向上の重要性を感じると多くの生徒が答えている。しかし海外に行かなくても英語技能の重要性（例えば長々としゃべるのではなく、要約は大切等）を生徒にいつ、どのように感じさせていくかという視点を、我々指導者側が常に持つことは非常に大切である。重要度の定期的な調査は、日々の授業、各種行事の組立てを考える上で貴重な資料となると考えられる。

最初に触れた本校英語科の「育てたい生徒像」は、現代社会のキーワードでもある「人々との協力・共生」を念頭に設定したものである。その実現には他者理解と同時に他者に自分自身を理解してもらわなければならないことも事実である。「相手に納得してもらうことのできる自己表現力」の育成は不可欠なものであり、生徒の英語技能がどの段階であっても、それぞれの生徒の将来に「自分の英語（My English）」を駆使できる技能を育成することは本校英語科の宿命であると考えている。自分の英語を身につけることは、より多くの人と心を通わせるための力を備えるだけでなく、「深く考える力、広い知識、そして価値観、世界観などによって支えられた生きる力を身につける」（村野井，2006）ことにつながる。これらの力を伸ばし、自分の頭で考え、自分で判断できる知性、そして異文化を持つ人と柔軟につながっていくことのできる「人間を育てる」ことができる英語教育を、KUSFの継続的な開発とともに、地道に目指していきたい。

謝 辞

神戸大学横川博一先生には、本校英語教育アドバイザーとして本取組に対して貴重なご助言を賜り、心より感謝を申し上げます。

文 献

- Council of Europe. (2001) : *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 川成美佳 (2013) : 「CEFR 準拠の英語到達基準 JS（ジャパン・スタンダード）の策定」外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標設定に関する検討会議（第 9 回）配付資料
- 文部科学省 (2013) : 『各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標設定のための手引き』
http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1332306.htm
- 文部科学省 (2016a) : 『平成 27 年度「英語教育実施状況調査」の結果について』
http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1369258.htm
- 文部科学省 (2016b) : 『平成 27 年度英語教育改善のための英語力調査事業報告』
http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1377767.htm
- 文部科学省 (2016c) : 『幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（中教審第 197 号）』
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm
- 村野井仁 (2006) : 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』. 東京: 大修館書店.
- 長沼君主, 吉田研作, 渡部良典, 根岸雅史, ベネッセコーポレーション国際教育事業部 (2005) 「学生 CAN-DO/英語教員意識調査から見た日本, 韓国, 中国英語教育の現状と今後の課題」In Benesse Corporation. (Ed.), 『東アジア高校英語教育 GTEC 調査: 高校生の意識と行動から見る英語教育の成果と課題』, 27-60, ベネッセ

セコーポレーション.

根岸雅史 (2001) : 「Can-do リストの開発ーそのプロセスと展望ー」『英語教育開発研究所研究紀

要』, 3, 22-29

投野由紀夫 (編) (2013) : 『英語到達度指標 CEFR-J ガイドブック』東京 : 大修館書店

資料 (KUSF 第 3 版 平成 29 年度発行)

KUSF (Kobe University) Secondary School of Reference for English Language) 2017版									
本校が目指す英語学習を通じた生徒像				英語によるコミュニケーション能力を活用し、地球上に生きる人間として、自分の足元から世界を見る視点を持ち、同時に多様化が進む世界の動きの中で人々と協力・共生しながら自分の生き方を選択し、地球的視野で考え行動できる生徒。					
				基礎力 スキル・運用能力					
段階	学年	英語5技能 熟達度	達成率	聞くこと	読むこと	書くこと			
	卒業後	C1		社会的諸問題について、自分の意見を持ちながら、批判的に聞くことができ、質問ができる。講義や会議に参加してその内容を理解し、メモで要点をまとめることができる。応答も素早く適切に行うことができる。聴解レベル:(通常の英語ニュース放送レベル)	社会的諸問題を持ったテキストについて、ざっと目を通しただけで、その概要を読み取ることができる。また、パラグラフごとに情報、意見、考えを区別しながら比較的短時間で読み取り、要約することができる。第三者に話し言葉、書き言葉で伝えることができる。読みがある程度自動化され、自然に理解ができる。	社会的諸問題について、自ら問いを設定し、自立的に調査した上で分析・考察を加えながら結論を導き出し、ある程度研究論文としての形式に基づきまとめることができる。			
				内容(話題・場面) 幅広い社会的諸問題・異文化に関する話題 素材(対象) 長めの講義・海外で放送されているニュースレポート・ドキュメンタリー、インタビュー等、標準的な発音で普通のスピード 英語(条件) 他者の意見を聞く時には、自分の知識や経験に基づいて話し手の主張を分析したり、判断したり、評価することができる。 論理性 “自分の意見と比べながら、批判的な視点を持って、話題の主題・要点を把握できる。” 行動(理解) “英語で要点をまとめる、第三者に伝えることができる。”	内容(話題・場面) 幅広い社会的諸問題・異文化に関する話題 素材(対象) ニュースレポート・新聞記事・説明文・文学作品・スピーチ等、一般的な内容の文章 英語(条件) 他者の意見が書かれたものを読む時には、自分の知識や経験に基づいて書き手の主張を分析したり、判断したり、評価することができる。 論理性 “文章の意や書き手の意図を理解することができる。” 行動(理解) “自分の意見と比べながら、批判的な視点を持って、読むことができる。” ・内容の要点をまとめる、自分の言葉で説明できる。	内容(話題・場面) 幅広い社会的諸問題・異文化に関する話題 素材(対象) エッセイ、スピーチ原稿、プレゼンテーション原稿、レポート原稿、研究論文等、参考資料や複数の視点を与えられれば 英語(条件) 様々な視点を示し、論理的にも明らかな構成を示しながら相手を納得し、説得できる文章を書くことができる。 論理性 “辞書はほとんど使わずに、短時間でもまとまりのある文章を書くことができる。” 行動(表現) “文法、語彙、正確な文法、句読法には比較的高い能力があり、誤りがあっても大きな誤解は招かない。”			
				内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・各種報道でなじみのある話題 素材(対象) 少し長めのスピーチ、インタビュー、ニュースレポート等、標準的な発音で普通のスピード 英語(条件) 他者の意見を聞く時には、他の事象や自分の意見と比較・検討を行いながら、話し手の主張を理解し、議論を深めていくことができる。 論理性 “日本語で読者のメモを取ることができる。” 行動(理解) “自分の意見と比べて聞き取ることができる。不足情報について相手に質問ができる。”	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・各種報道でなじみのある話題 素材(対象) 海外の英字新聞記事、インターネット上の英文記事等、部分的に読み取れていて、ある程度内容を知っている文章 英語(条件) 他者の意見が書かれたものを読む時には、他の事象や自分の意見と比較・検討を行いながら、書き手の主張を理解し、議論を深めていくことができる。 論理性 “英文の種類や読む目的に応じて、スピードや方法を変えながら適切に読むことができる。” 行動(理解) “内容の要点をまとめる、自分の言葉で説明できる。”	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・各種報道でなじみのある話題 素材(対象) エッセイ、スピーチ原稿、プレゼンテーション原稿、レポート原稿、小論文等、参考となる資料を与えられれば 英語(条件) “幅広い話題、必要な文法構造を有効に使用して、辞書はほとんど使わずに書くことができる。” 論理性 “必要に応じて辞書を用いたり、参考となる資料を与えられれば”			
Grade 6	第6学年 (学年末)	B1.2	20%	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・関心のある話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) 他者の意見を聞く時には、話し手の主張のポイントを理解しながら、論理展開に矛盾や飛躍がないか意識することができる。 論理性 “内容のほとんどを聞き取り、要点を把握できる。” 行動(理解) “日本語で要点を伝えることができる。”	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・関心のある話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) 他者の意見が書かれたものを読む時には、書き手の主張のポイントを理解しながら、論理展開に矛盾や飛躍がないか意識することができる。 論理性 “必要に応じて辞書を使えば、必要情報の収集、あるいは要旨の把握ができる。” 行動(理解) “大まかに内容の要点をまとめる、自分のことばである程度の説明ができる。”	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・関心のある話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) ある内容について多くの自分の考えを出した後に、自分の意見とその理由について、段落構成及び文章内容の一貫性を意識しながら複数の段落で書くことができる。理由については、理由を支える効果的な証拠・情報を取り入れることができる。 論理性 “基本的な語彙材料、文法構造を用いてほぼ正確に書くことができる。”			
				内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) 他者の意見を聞く時には、話し手の主張のポイントを理解しながら、論理展開に矛盾や飛躍がないか意識することができる。 論理性 “内容のほとんどを聞き取り、要点を把握できる。” 行動(理解) “日本語で要点を伝えることができる。”	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) 他者の意見が書かれたものを読む時には、書き手の主張のポイントを理解しながら、論理展開に矛盾や飛躍がないか意識することができる。 論理性 “必要に応じて辞書を使えば、必要情報の収集、あるいは要旨の把握ができる。” 行動(理解) “大まかに内容の要点をまとめる、自分のことばである程度の説明ができる。”	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) ある内容について多くの自分の考えを出した後に、自分の意見とその理由について、段落構成及び文章内容の一貫性を意識しながら複数の段落で書くことができる。理由については、理由を支える効果的な証拠・情報を取り入れることができる。 論理性 “基本的な語彙材料、文法構造を用いてほぼ正確に書くことができる。”			
				内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) 他者の意見を聞く時には、話し手の主張のポイントを理解しながら、論理展開に矛盾や飛躍がないか意識することができる。 論理性 “内容のほとんどを聞き取り、要点を把握できる。” 行動(理解) “日本語で要点を伝えることができる。”	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) 他者の意見が書かれたものを読む時には、書き手の主張のポイントを理解しながら、論理展開に矛盾や飛躍がないか意識することができる。 論理性 “必要に応じて辞書を使えば、必要情報の収集、あるいは要旨の把握ができる。” 行動(理解) “大まかに内容の要点をまとめる、自分のことばである程度の説明ができる。”	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) ある内容について多くの自分の考えを出した後に、自分の意見とその理由について、段落構成及び文章内容の一貫性を意識しながら複数の段落で書くことができる。理由については、理由を支える効果的な証拠・情報を取り入れることができる。 論理性 “基本的な語彙材料、文法構造を用いてほぼ正確に書くことができる。”			
Grade 5	第5学年 (学年末)	B1.1	40%	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・関心のある話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) 他者の意見を聞く時には、話し手の主張のポイントを理解しながら、論理展開に矛盾や飛躍がないか意識することができる。 論理性 “内容のほとんどを聞き取り、要点を把握できる。” 行動(理解) “日本語で要点を伝えることができる。”	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・関心のある話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) 他者の意見が書かれたものを読む時には、書き手の主張のポイントを理解しながら、論理展開に矛盾や飛躍がないか意識することができる。 論理性 “必要に応じて辞書を使えば、必要情報の収集、あるいは要旨の把握ができる。” 行動(理解) “大まかに内容の要点をまとめる、自分のことばである程度の説明ができる。”	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・関心のある話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) ある内容について多くの自分の考えを出した後に、自分の意見とその理由について、段落構成及び文章内容の一貫性を意識しながら複数の段落で書くことができる。理由については、理由を支える効果的な証拠・情報を取り入れることができる。 論理性 “基本的な語彙材料、文法構造を用いてほぼ正確に書くことができる。”			
				内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) 他者の意見を聞く時には、話し手の主張のポイントを理解しながら、論理展開に矛盾や飛躍がないか意識することができる。 論理性 “内容のほとんどを聞き取り、要点を把握できる。” 行動(理解) “日本語で要点を伝えることができる。”	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) 他者の意見が書かれたものを読む時には、書き手の主張のポイントを理解しながら、論理展開に矛盾や飛躍がないか意識することができる。 論理性 “必要に応じて辞書を使えば、必要情報の収集、あるいは要旨の把握ができる。” 行動(理解) “大まかに内容の要点をまとめる、自分のことばである程度の説明ができる。”	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) ある内容について多くの自分の考えを出した後に、自分の意見とその理由について、段落構成及び文章内容の一貫性を意識しながら複数の段落で書くことができる。理由については、理由を支える効果的な証拠・情報を取り入れることができる。 論理性 “基本的な語彙材料、文法構造を用いてほぼ正確に書くことができる。”			
				内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) 他者の意見を聞く時には、話し手の主張のポイントを理解しながら、論理展開に矛盾や飛躍がないか意識することができる。 論理性 “内容のほとんどを聞き取り、要点を把握できる。” 行動(理解) “日本語で要点を伝えることができる。”	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) 他者の意見が書かれたものを読む時には、書き手の主張のポイントを理解しながら、論理展開に矛盾や飛躍がないか意識することができる。 論理性 “必要に応じて辞書を使えば、必要情報の収集、あるいは要旨の把握ができる。” 行動(理解) “大まかに内容の要点をまとめる、自分のことばである程度の説明ができる。”	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) ある内容について多くの自分の考えを出した後に、自分の意見とその理由について、段落構成及び文章内容の一貫性を意識しながら複数の段落で書くことができる。理由については、理由を支える効果的な証拠・情報を取り入れることができる。 論理性 “基本的な語彙材料、文法構造を用いてほぼ正確に書くことができる。”			
Grade 4	第4学年 (学年末)	A2.2	60%	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) 他者の意見を聞く時には、話し手の主張のポイントを理解しながら、論理展開に矛盾や飛躍がないか意識することができる。 論理性 “内容のほとんどを聞き取り、要点を把握できる。” 行動(理解) “日本語で要点を伝えることができる。”	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) 他者の意見が書かれたものを読む時には、書き手の主張のポイントを理解しながら、論理展開に矛盾や飛躍がないか意識することができる。 論理性 “必要に応じて辞書を使えば、必要情報の収集、あるいは要旨の把握ができる。” 行動(理解) “大まかに内容の要点をまとめる、自分のことばである程度の説明ができる。”	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) ある内容について多くの自分の考えを出した後に、自分の意見とその理由について、段落構成及び文章内容の一貫性を意識しながら複数の段落で書くことができる。理由については、理由を支える効果的な証拠・情報を取り入れることができる。 論理性 “基本的な語彙材料、文法構造を用いてほぼ正確に書くことができる。”			
				内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) 他者の意見を聞く時には、話し手の主張のポイントを理解しながら、論理展開に矛盾や飛躍がないか意識することができる。 論理性 “内容のほとんどを聞き取り、要点を把握できる。” 行動(理解) “日本語で要点を伝えることができる。”	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) 他者の意見が書かれたものを読む時には、書き手の主張のポイントを理解しながら、論理展開に矛盾や飛躍がないか意識することができる。 論理性 “必要に応じて辞書を使えば、必要情報の収集、あるいは要旨の把握ができる。” 行動(理解) “大まかに内容の要点をまとめる、自分のことばである程度の説明ができる。”	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) ある内容について多くの自分の考えを出した後に、自分の意見とその理由について、段落構成及び文章内容の一貫性を意識しながら複数の段落で書くことができる。理由については、理由を支える効果的な証拠・情報を取り入れることができる。 論理性 “基本的な語彙材料、文法構造を用いてほぼ正確に書くことができる。”			
				内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) 他者の意見を聞く時には、話し手の主張のポイントを理解しながら、論理展開に矛盾や飛躍がないか意識することができる。 論理性 “内容のほとんどを聞き取り、要点を把握できる。” 行動(理解) “日本語で要点を伝えることができる。”	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) 他者の意見が書かれたものを読む時には、書き手の主張のポイントを理解しながら、論理展開に矛盾や飛躍がないか意識することができる。 論理性 “必要に応じて辞書を使えば、必要情報の収集、あるいは要旨の把握ができる。” 行動(理解) “大まかに内容の要点をまとめる、自分のことばである程度の説明ができる。”	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) ある内容について多くの自分の考えを出した後に、自分の意見とその理由について、段落構成及び文章内容の一貫性を意識しながら複数の段落で書くことができる。理由については、理由を支える効果的な証拠・情報を取り入れることができる。 論理性 “基本的な語彙材料、文法構造を用いてほぼ正確に書くことができる。”			
Grade 3	第3学年 (学年末)	A2.1	80%	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) 他者の意見を聞く時には、話し手の主張のポイントを理解しながら、論理展開に矛盾や飛躍がないか意識することができる。 論理性 “内容のほとんどを聞き取り、要点を把握できる。” 行動(理解) “日本語で要点を伝えることができる。”	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) 他者の意見が書かれたものを読む時には、書き手の主張のポイントを理解しながら、論理展開に矛盾や飛躍がないか意識することができる。 論理性 “必要に応じて辞書を使えば、必要情報の収集、あるいは要旨の把握ができる。” 行動(理解) “大まかに内容の要点をまとめる、自分のことばである程度の説明ができる。”	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) ある内容について多くの自分の考えを出した後に、自分の意見とその理由について、段落構成及び文章内容の一貫性を意識しながら複数の段落で書くことができる。理由については、理由を支える効果的な証拠・情報を取り入れることができる。 論理性 “基本的な語彙材料、文法構造を用いてほぼ正確に書くことができる。”			
				内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) 他者の意見を聞く時には、話し手の主張のポイントを理解しながら、論理展開に矛盾や飛躍がないか意識することができる。 論理性 “内容のほとんどを聞き取り、要点を把握できる。” 行動(理解) “日本語で要点を伝えることができる。”	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) 他者の意見が書かれたものを読む時には、書き手の主張のポイントを理解しながら、論理展開に矛盾や飛躍がないか意識することができる。 論理性 “必要に応じて辞書を使えば、必要情報の収集、あるいは要旨の把握ができる。” 行動(理解) “大まかに内容の要点をまとめる、自分のことばである程度の説明ができる。”	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) ある内容について多くの自分の考えを出した後に、自分の意見とその理由について、段落構成及び文章内容の一貫性を意識しながら複数の段落で書くことができる。理由については、理由を支える効果的な証拠・情報を取り入れることができる。 論理性 “基本的な語彙材料、文法構造を用いてほぼ正確に書くことができる。”			
				内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) 他者の意見を聞く時には、話し手の主張のポイントを理解しながら、論理展開に矛盾や飛躍がないか意識することができる。 論理性 “内容のほとんどを聞き取り、要点を把握できる。” 行動(理解) “日本語で要点を伝えることができる。”	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) 他者の意見が書かれたものを読む時には、書き手の主張のポイントを理解しながら、論理展開に矛盾や飛躍がないか意識することができる。 論理性 “必要に応じて辞書を使えば、必要情報の収集、あるいは要旨の把握ができる。” 行動(理解) “大まかに内容の要点をまとめる、自分のことばである程度の説明ができる。”	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) ある内容について多くの自分の考えを出した後に、自分の意見とその理由について、段落構成及び文章内容の一貫性を意識しながら複数の段落で書くことができる。理由については、理由を支える効果的な証拠・情報を取り入れることができる。 論理性 “基本的な語彙材料、文法構造を用いてほぼ正確に書くことができる。”			
Grade 2	第2学年 (学年末)	A1.3	90%	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) 他者の意見を聞く時には、話し手の主張のポイントを理解しながら、論理展開に矛盾や飛躍がないか意識することができる。 論理性 “内容のほとんどを聞き取り、要点を把握できる。” 行動(理解) “日本語で要点を伝えることができる。”	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) 他者の意見が書かれたものを読む時には、書き手の主張のポイントを理解しながら、論理展開に矛盾や飛躍がないか意識することができる。 論理性 “必要に応じて辞書を使えば、必要情報の収集、あるいは要旨の把握ができる。” 行動(理解) “大まかに内容の要点をまとめる、自分のことばである程度の説明ができる。”	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) ある内容について多くの自分の考えを出した後に、自分の意見とその理由について、段落構成及び文章内容の一貫性を意識しながら複数の段落で書くことができる。理由については、理由を支える効果的な証拠・情報を取り入れることができる。 論理性 “基本的な語彙材料、文法構造を用いてほぼ正確に書くことができる。”			
				内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) 他者の意見を聞く時には、話し手の主張のポイントを理解しながら、論理展開に矛盾や飛躍がないか意識することができる。 論理性 “内容のほとんどを聞き取り、要点を把握できる。” 行動(理解) “日本語で要点を伝えることができる。”	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) 他者の意見が書かれたものを読む時には、書き手の主張のポイントを理解しながら、論理展開に矛盾や飛躍がないか意識することができる。 論理性 “必要に応じて辞書を使えば、必要情報の収集、あるいは要旨の把握ができる。” 行動(理解) “大まかに内容の要点をまとめる、自分のことばである程度の説明ができる。”	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) ある内容について多くの自分の考えを出した後に、自分の意見とその理由について、段落構成及び文章内容の一貫性を意識しながら複数の段落で書くことができる。理由については、理由を支える効果的な証拠・情報を取り入れることができる。 論理性 “基本的な語彙材料、文法構造を用いてほぼ正確に書くことができる。”			
				内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) 他者の意見を聞く時には、話し手の主張のポイントを理解しながら、論理展開に矛盾や飛躍がないか意識することができる。 論理性 “内容のほとんどを聞き取り、要点を把握できる。” 行動(理解) “日本語で要点を伝えることができる。”	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) 他者の意見が書かれたものを読む時には、書き手の主張のポイントを理解しながら、論理展開に矛盾や飛躍がないか意識することができる。 論理性 “必要に応じて辞書を使えば、必要情報の収集、あるいは要旨の把握ができる。” 行動(理解) “大まかに内容の要点をまとめる、自分のことばである程度の説明ができる。”	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) ある内容について多くの自分の考えを出した後に、自分の意見とその理由について、段落構成及び文章内容の一貫性を意識しながら複数の段落で書くことができる。理由については、理由を支える効果的な証拠・情報を取り入れることができる。 論理性 “基本的な語彙材料、文法構造を用いてほぼ正確に書くことができる。”			
Grade 1	第1学年 (学年末)	A1.2	100%	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) 他者の意見を聞く時には、話し手の主張のポイントを理解しながら、論理展開に矛盾や飛躍がないか意識することができる。 論理性 “内容のほとんどを聞き取り、要点を把握できる。” 行動(理解) “日本語で要点を伝えることができる。”	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) 他者の意見が書かれたものを読む時には、書き手の主張のポイントを理解しながら、論理展開に矛盾や飛躍がないか意識することができる。 論理性 “必要に応じて辞書を使えば、必要情報の収集、あるいは要旨の把握ができる。” 行動(理解) “大まかに内容の要点をまとめる、自分のことばである程度の説明ができる。”	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) ある内容について多くの自分の考えを出した後に、自分の意見とその理由について、段落構成及び文章内容の一貫性を意識しながら複数の段落で書くことができる。理由については、理由を支える効果的な証拠・情報を取り入れることができる。 論理性 “基本的な語彙材料、文法構造を用いてほぼ正確に書くことができる。”			
				内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) 他者の意見を聞く時には、話し手の主張のポイントを理解しながら、論理展開に矛盾や飛躍がないか意識することができる。 論理性 “内容のほとんどを聞き取り、要点を把握できる。” 行動(理解) “日本語で要点を伝えることができる。”	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) 他者の意見が書かれたものを読む時には、書き手の主張のポイントを理解しながら、論理展開に矛盾や飛躍がないか意識することができる。 論理性 “必要に応じて辞書を使えば、必要情報の収集、あるいは要旨の把握ができる。” 行動(理解) “大まかに内容の要点をまとめる、自分のことばである程度の説明ができる。”	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) ある内容について多くの自分の考えを出した後に、自分の意見とその理由について、段落構成及び文章内容の一貫性を意識しながら複数の段落で書くことができる。理由については、理由を支える効果的な証拠・情報を取り入れることができる。 論理性 “基本的な語彙材料、文法構造を用いてほぼ正確に書くことができる。”			
				内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) 他者の意見を聞く時には、話し手の主張のポイントを理解しながら、論理展開に矛盾や飛躍がないか意識することができる。 論理性 “内容のほとんどを聞き取り、要点を把握できる。” 行動(理解) “日本語で要点を伝えることができる。”	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) 他者の意見が書かれたものを読む時には、書き手の主張のポイントを理解しながら、論理展開に矛盾や飛躍がないか意識することができる。 論理性 “必要に応じて辞書を使えば、必要情報の収集、あるいは要旨の把握ができる。” 行動(理解) “大まかに内容の要点をまとめる、自分のことばである程度の説明ができる。”	内容(話題・場面) 学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題、短いスピーチ、インタビュー、ニュース、標準的な発音で普通のスピード 素材(対象) ある内容について多くの自分の考えを出した後に、自分の意見とその理由について、段落構成及び文章内容の一貫性を意識しながら複数の段落で書くことができる。理由については、理由を支える効果的な証拠・情報を取り入れることができる。 論理性 “基本的な語彙材料、文法構造を用いてほぼ正確に書くことができる。”			

				思考力		実践力	
				知識・理解	論理的・批判的思考力等 ※1	課題探究力	グローバルキャリア (市民的資質・能力) ※2
話すこと〔発表〕		やり取りすること					
日頃から社会的諸問題に関心を持っている。現状に対する知識を持ち、準備することなく根拠に基づき自分の考えをある程度まとめた内容で表現することができる。また、予測可能な質問に対してすぐに返答することが可能である。		社会的諸問題について、複数の相手と解決へ向けた議論することができる。議論の中で相違点、類似点を分析し、相違点について交渉を通して妥協点を見出そうとする姿が見られる。					
内容(話題・場面)	幅広い社会的諸問題・異文化に関する話題 スピーチ・プレゼンテーション、ディスカッション、ニュースの概要、研究論文等 個人の経験の範囲内であれば、馴染みのある話題であれば	内容(話題・場面)	幅広い社会的諸問題・異文化に関する話題 【発表者】聞き手からの質問や意見 【聞き手】発表者の発表内容 【発表者】追加情報を加えたり、様々な意見を受け入れながら 【聞き手】明確な根拠を示しながら				
素材(対象)		素材(対象)					
英語(条件)		英語(条件)					
論理性	複数の視点を示し、意見や論点を整理しながら論理的に、詳細に自分の意見を述べることができる。	論理性	複数の視点を示し、明快な構成を示しながら論理的に、詳細に自分の意見を述べることができる。				
行動(表現)	・幅広い話題や言語形式、ある程度の慣用表現も使って、根拠を示したり、賛成や反対の理由をあげたりしながら説明することができる。 ・発音やイントネーションは明確で自然で、話し方はテンポよく、文法も適切に使用され、ちょっとした誤りはあるが、理解を阻害することはない。	行動	【発表者】相手からの一連の質問に柔軟に対応できる。 【聞き手】概要を理解した上で、意見を述べたり、質問を投げかけることができる。				
内容(話題・場面)	学習した内容に関連した社会的諸問題・各種報道でなじみのある話題 スピーチ・プレゼンテーション、ディスカッション、ディベート、小論文の概要等 多角的にリサーチをした上で、視聴覚機器を使いながら	内容(話題・場面)	学習した内容に関連した社会的諸問題・各種報道でなじみのある話題 【発表者】聞き手からの質問や意見 【聞き手】発表者の発表内容 【発表者】追加情報を加えたり、様々な意見を受け入れながら 【聞き手】明確な根拠を示しながら	地球課題 世界社会(発展) ・地球課題や国際問題について多面的に理解し、問題解決へ向けた行動や提案を具体的に示している。	論理的思考力 ・テーマに対して、反論や意見が分かれる中で、一貫性のある自分の主張を作り出している。 多元的思慮力 ・話し手、書き手からの様々な情報、意見を多面的にとらえ、自分なりの解決策を考えだしている。 体系的思慮力 ・複数の概念の比較をとおし独自の新しい概念化を試みようとしている。	地球課題探究(発展) ・地球規模の課題について自ら問いを立て、積極的に調査したり考察したりして結論を導き出している。 ・自ら調べたこと英語小論文形式にまとめている。	自律的思考と行動 ・社会・共生をめざした自主とその実現へ向けた自律的行動をしようとしている。
英語(条件)		英語(条件)		地球課題 世界社会(基礎) 国内社会(発展) ・国内社会問題を多面的に理解し、また国際問題の基本情報を理解している。		地球課題探究(基礎) ・地球規模の課題について、自分の問いを立て、リサーチをしながらその問いの答えを探している。 ・地球規模の課題に興味を持ち、自ら調べたことをもとめて、英語で積極的に表現している。	【コミュニケーション/意欲・態度】 ・英語力の向上に、自ら進んで英字新聞や英語ニュースなどを利用しようとしている。
論理性	いくつかの視点を含め、理由を挙げながら自分の意見を論理的に述べることができる。	論理性	【発表者】聞き手からの一連の質問に対応できる。明確に反対意見を表明することもできる。 【聞き手】明確に自分の意見を述べることができる。				
行動(表現)	事実関係と自分の考えを明確に示しながら、個人で10分程度の発表をすることができる。	行動	【発表者】聞き手との質疑応答が比較的流暢な英語でスムーズにできる。 【聞き手】自分の意見と比較し、不足情報について質問することができる。				
内容(話題・場面)	学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題・興味のある話題 スピーチ・プレゼンテーション、まとまりのある文章の要約 パラグラフ構成を明確にした論議を準備し、簡単なメモを見ながら	内容(話題・場面)	学習した内容に関連した社会的諸問題・身近な話題・興味のある話題 【発表者】発表後の聞き手からの予測可能な質問 【聞き手】発表者の発表内容 【発表者】追加情報を加えたり、様々な意見を受け入れながら 【聞き手】明確な根拠を示しながら	国内・外特定課題 国内社会(基礎) 国内文化(発展) ・国内文化、異文化について多面的に理解している。 社会的思考力 ・話し手、書き手の意図や、内容の一貫性(意味的なまとまりの良さ)に着目しながら論理的に考え、理解している。 ・自分の意見や考えを具体例やデータを示している。 多元的思慮力 ・話し手、書き手からの様々な情報、意見を多面的にとらえ、自分なりの解決策を考えだしている。	論理的思考力 ・話し手、書き手の意図や、内容の一貫性(意味的なまとまりの良さ)に着目しながら論理的に考え、理解している。 ・自分の意見や考えを具体例やデータを示している。 多元的思慮力 ・話し手、書き手からの様々な情報、意見を多面的にとらえ、自分なりの解決策を考えだしている。	社会問題探究(発展) ・社会問題に興味を持ち、自ら調べたことをもとめて、英語で積極的に表現している。	社会的理解 他者理解 ※社会の様々な視点から事実や人間を理解しようとしていることができる。
英語(条件)		英語(条件)		国内・外特定課題 国内社会(基礎) 国内文化(発展) ・国内文化、異文化について多面的に理解している。 社会的思考力 ・話し手、書き手からの情報、意見をそのままのまみせず、根拠を明確にしたうえで自分の考え・意見を表現したり質問したりしている。		社会問題探究(基礎) ・社会問題に興味を持ち、自ら調べたことをもとめて、英語で積極的に表現している。	【コミュニケーション/意欲・態度】 ・自分の伝えたいことを表現するために、必要となる言葉や用語を辞書や文法書などの各種辞書を用いて調べ、自分の表現力を高める努力をしている。 ・様々な国、地域に多様な英語が存在することを認識し、英語学習に活用している。 ・意見を述べるためには、知識や実際の体験が必要であることを気づき、意図的にそれを覚えるよう心がけている。 ・英語を聴くだけでなく、その意味を推測したりしながら聞き/読み続けている。
論理性	自分の意見や感想を、具体的な例を付け加え、筋道を立てて分かりやすく話すことができる。	論理性	【発表者】単純な英文で明確に答え、追加情報を述べることができる。 【聞き手】発表内容を英文でまとめることができる。 簡単な質問をすることができる。				
行動(表現)	ペア・グループまたは個人で5～10分程度、比較的自然な言葉遣いで、伝えたいことをある程度的確に発表することができる。	行動	【発表者】単純な英文で明確に答え、追加情報を述べることができる。 【聞き手】発表内容を英文でまとめることができる。 簡単な質問をすることができる。				
内容(話題・場面)	学習した話題・個人的に直接かわかる話題・短い簡単な説明 学習した日常的な話題や、場所などの自分に直接関係する事項 パラグラフ構成を意識し、定義表現を用いながら作ったり、筋道を準備し、補助となる絵や物を用いて	内容(話題・場面)	学習した話題・個人的に直接かわかる話題・短い簡単な説明 【発表者】発表後の聞き手からの予測可能な質問 【聞き手】発表者の発表内容 【発表者】追加情報を加えたり、様々な意見を受け入れながら 【聞き手】明確な根拠を示しながら	国内・外特定課題 国内社会(基礎) 国内文化(発展) ・国内文化、異文化について多面的に理解している。 社会的思考力 ・話し手、書き手からの情報、意見をそのままのまみせず、根拠を明確にしたうえで自分の考え・意見を表現したり質問したりしている。	多元的思慮力 ・話し手、書き手からの様々な情報、意見を多面的にとらえ、自分なりの解決策を考えだしている。	社会問題探究(基礎) ・社会問題に興味を持ち、自ら調べたことをもとめて、英語で積極的に表現している。	【文化理解/発信】 ・学校、家庭等、日常の生活や風俗習慣の相違点や類似点を理解している。 ・コミュニケーションを通して、異なる文化的背景を持つ人々の心の通い方を理解しようとしている。 ・日本の観光名所や文化など、日本の魅力を外国の人々に説明している。
英語(条件)		英語(条件)		国内・外特定課題 国内社会(基礎) 国内文化(発展) ・国内文化、異文化について多面的に理解している。 社会的思考力 ・話し手、書き手からの情報、意見をそのままのまみせず、根拠を明確にしたうえで自分の考え・意見を表現したり質問したりしている。		社会問題探究(発展) ・社会問題に興味を持ち、自ら調べたことをもとめて、英語で積極的に表現している。	【文化理解/発信】 ・学校、家庭等、日常の生活や風俗習慣の相違点や類似点を理解している。 ・コミュニケーションを通して、異なる文化的背景を持つ人々の心の通い方を理解しようとしている。 ・日本の観光名所や文化など、日本の魅力を外国の人々に説明している。
論理性	日常的な話題について、自分の意見や気持ちを加えて、説明することができる。	論理性	【発表者】予測可能な質問について単純な英文で答えることができる。 【聞き手】発表内容の一部を英文でまとめることができる。 簡単な質問をすることができる。				
行動(表現)	・個人で簡単な英語で描写や説明をすることができる。 ・ペア・グループで5分以上の発表をすることができる。	行動	【発表者】予測可能な質問について単純な英文で答えることができる。 【聞き手】発表内容の一部を英文でまとめることができる。 簡単な質問をすることができる。				
内容(話題・場面)	身近な話題、自分の経験 学習した自分自身に直接関わる、ごく身近な事柄(趣味、部活動、家族等) 事実と感想・意見を区別した筋道を新もって準備して	内容(話題・場面)	身近な話題、自分の経験 【発表者】質問された内容 【聞き手】発表者の発表内容 【発表者】追加情報を加えたり、様々な意見を受け入れながら 【聞き手】明確な根拠を示しながら	国内・外特定課題 国内社会(基礎) 国内文化(発展) ・国内文化、異文化について多面的に理解している。 社会的思考力 ・話し手、書き手からの情報、意見をそのままのまみせず、根拠を明確にしたうえで自分の考え・意見を表現したり質問したりしている。	多元的思慮力 ・話し手、書き手からの様々な情報、意見を多面的にとらえ、自分なりの解決策を考えだしている。	自己と他者探究(発展) ・自分と直接関係する事柄を英語で表現することに慣れていく。	自己理解 他者理解 ※自己や直接関係する他者を肯定的に理解しようとしている。
英語(条件)		英語(条件)		国内・外特定課題 国内社会(基礎) 国内文化(発展) ・国内文化、異文化について多面的に理解している。 社会的思考力 ・話し手、書き手からの情報、意見をそのままのまみせず、根拠を明確にしたうえで自分の考え・意見を表現したり質問したりしている。		自己と他者探究(基礎) ・物事にに対して疑問を持ち、問題点を見つけている。	【コミュニケーション/意欲・態度】 ・自分の伝えたいことを表現するために、必要となる言葉や用語を辞書や文法書などの各種辞書を用いて調べ、自分の表現力を高める努力をしている。 ・様々な国、地域に多様な英語が存在することを認識し、英語学習に活用している。 ・意見を述べるためには、知識や実際の体験が必要であることを気づき、意図的にそれを覚えるよう心がけている。 ・英語を聴くだけでなく、その意味を推測したりしながら聞き/読み続けている。
論理性	複数の文で説明したり、意見や感想を述べることができる。 ・学習した基本的な語彙、表現、文法、文構造などに限られるが、効果的に使って、意思を伝えたり発表したりすることができる。 ・ペア・グループまたは個人で3分程度のスピーチを準備し、発表する。	論理性	【発表者】質問された内容に短い応答ができる。 【聞き手】ある程度の質問をたつた上で、複数の文で説明したり、意見や感想を述べることができる。 【発表者】質問された内容に短い応答ができる。 【聞き手】ある程度の質問をたつた上で、複数の文で説明したり、意見や感想を述べることができる。				
行動(表現)	ペア・グループまたは個人で1分程度の発表ができる。	行動	【発表者】質問された内容に短い応答ができる。 【聞き手】ある程度の質問をたつた上で、複数の文で説明したり、意見や感想を述べることができる。 【発表者】質問された内容に短い応答ができる。 【聞き手】ある程度の質問をたつた上で、複数の文で説明したり、意見や感想を述べることができる。				
内容(話題・場面)	身近でよく知っている話題 学習した日常生活に直接必要なこと(自伝や食事の好き嫌いなど)や自分自身に関する話題 絵・図・実物を使い、暗唱や絵・図・実物の描写を事前に分けて準備した上で	内容(話題・場面)	身近でよく知っている話題 【発表者】質問された内容 【聞き手】発表者の発表内容 【発表者】追加情報を加えたり、様々な意見を受け入れながら 【聞き手】明確な根拠を示しながら	国内・外特定課題 国内社会(基礎) 国内文化(発展) ・国内文化、異文化について多面的に理解している。 社会的思考力 ・話し手、書き手からの情報、意見をそのままのまみせず、根拠を明確にしたうえで自分の考え・意見を表現したり質問したりしている。	多元的思慮力 ・話し手、書き手からの様々な情報、意見を多面的にとらえ、自分なりの解決策を考えだしている。	自己と他者探究(基礎) ・自分と直接関係する事柄を英語で表現することに慣れていく。	【文化理解/発信】 ・世界各々の文化に興味を持っている。 ・他国の文化と日本文化との相違点を意識し、その違いをそれぞれの文化の特徴として理解している。 ・神戸の観光名所や特産品など、街の魅力を外国の人々に説明している。
英語(条件)		英語(条件)		国内・外特定課題 国内社会(基礎) 国内文化(発展) ・国内文化、異文化について多面的に理解している。 社会的思考力 ・話し手、書き手からの情報、意見をそのままのまみせず、根拠を明確にしたうえで自分の考え・意見を表現したり質問したりしている。		自己と他者探究(発展) ・自分と直接関係する事柄を英語で表現することに慣れていく。	【文化理解/発信】 ・世界各々の文化に興味を持っている。 ・他国の文化と日本文化との相違点を意識し、その違いをそれぞれの文化の特徴として理解している。 ・神戸の観光名所や特産品など、街の魅力を外国の人々に説明している。
論理性	単純な表現と短い文で説明したり、意見や感想を述べることができる。 ・ペア・グループまたは個人で1分程度の発表ができる。	論理性	【発表者】聞き手からの質問に、ごく基本的な言葉や表現、文法を使ってYes/Noなどを使いながら短い応答ができる。 【聞き手】発表内容に関する短い質問・感想を述べる。				
行動(表現)		行動					

※1 本校英語科における論理的思考力については、「英語で書かれたり話されたりする情報・事象や課題の背景や原因・理由を、自分の先入観に惑わされずに、第三者にも理解してもらえるよう理解できるように聞き取り・読み取る」とおおよび、相手の考えを理解した上で、相手や第三者にも理解し納得してもらえよように、筋道を立てて分かりやすい英語で話し・書くことと位置付けている。

※2 グローバルキャリアについては「(英語を通して)ひととの、自との対話、理解を通して自律的に社会や集団と関わることをできる態度と能力」と英語科では位置付けている。

※1 本校英語科における論理的思考力については、「英語で書かれたり話されたりする情報・事実や課題の背景や原因・理由を、自分の先入観に迷われないで、第三者にも納得してもらえるような理解ができるように聞き取り、読み取ること、および相手の考えを理解した上で、相手や第三者にも理解し納得してもらえるように、筋道を立てて分かりやすい英語で話し書くこと」と位置付けている。

※2「グローバルキャリア」については「(英語を通して)ひととの、自分との対話、理解を通して社会的な関わりと関わることで、できる態度と能力」と英語科では位置付けている。